

風流船揃

長唄 全詞章

二代目 杵屋勝三郎 作曲

安政三年（一八五六）

「風流船揃」とも書く

〔本調子〕 そもそも船の始まりは、唐土皇帝に仕へし貨狄といへる臣下あり、秋吹く風に庭の池へ、散り浮く柳の一と葉の上に、蜘蛛の乗りてささがにの、糸引きはへし姿より、匠み出せし船とかや

見渡せば、海原遠く真帆片帆、行きかふ船の数々は、霞の浦に見え隠れ、白波寄する磯近く、千鳥鳴の浮き姿、網曳く船や釣舟の、皆漕ぎ連れて行き通ふ、眺め長閑き春景色、面白やつくばねの峯より落つる水筋も、積もり積もりて秩父より、清く流るる隅田川、月よ花よと漕ぎ出だす、屋形屋根船猪牙荷足、御厩隅田の渡し舟、遙か向ふを竹屋と呼ぶ声に、山谷の堀を乗り出だす、恋の関屋の里近く、花見の船の向島、軒を並べし屋根船の、簾の内の爪弾は、もしやそれかと人知れず、気をもみ裏を吹き返し、追手の風に

〔三下り〕 上汐に、佃々と急いで押せば、又上手から二挺三味線弾き連れて、様はさんやの三日月様よ、宵にちらりと見たばかり、しよんがいな

負けず劣らぬ、行き合の、船の横から三筋の糸に、二挺鼓を打つやうつつの浪の船

自体我等は都の生れ、色にそやされこんな形になられた、見事な酒は多けれど、

聞いてびつくり、丸三杯呑んだ盃、ついつい、ついのつい

面舵取舵声々に、乗りしお客の気も浮かれ、ゴウチエイハマカイ、払つて一拳押へましよ、

拳うちやめて踊るやら、扇鳴らして唄ふやら、しどもなや

賑はふ隅田の川面は、これぞ真の江戸の花、栄ふる御代こそ目出たけれ、栄ふる御代こそ

目出たけれ